〔コメント〕

移民研究における地理学的研究の特色と課題

－椿　真智子・石川友紀報告に寄せて－

山　下　清　海

Ⅰ．はじめに

人々の生活や環境に強い関心をもつ地理学研究者にとって，移民は，きわめて興味深い研究対象である。住み慣れた土地を離れ，従来とは異なる環境で生活することになった移民は，これまでの経験を生かしながら，新しい社会での生活を始めることになる。その過程で，伝統的な生活様式を変容させながら，居住地域の環境への適応を試みることになる。そのプロセスは，地理学的に重要な研究テーマになる。

評者は，これまで中国大陸からの移民である華人の社会を研究してきたが，これらの経験を踏まえて，本稿では，椿真智子および石川友紀による2つの報告に対してコメントを加えながら，移民研究における地理学的な特色と今後の課題について考察する。

Ⅱ．椿真智子報告「カナダにおけるエスニック・マイノリティの文化継承－第二次大戦後の日系社会を中心に－」に関するコメント

椿報告は，カナダの日系社会を対象に，第二次世界大戦後の日系文化の維持・継承がいかなる社会的組織や「場」を通して実践されてきたのかについて検討したものである。ここでは，移民の文化継承という問題について，カナダ最大の日系人口を有するバンクーバーと，日系人口が小規模で減少傾向にあるマニトバ州の州都ウイニペグという２つの地域を比較するという方法をとっている。

椿報告によれば，バンクーバーでは，70年代以降，新たな日本からの移住者が増加し，多様な主体による文化継承の場が形成されていった。また，活動に非日系のメンバーが増加しているという。一方，ウイニペグでは，日系のみならず非日系も加わって，日系文化が実践されているという。

地理学的な研究では，複数の事例地域の比較考察をさらに進め，カナダにおける日系人社会が，どのような方向に向かおうとしているのか，それはなぜなのか，他の移民集団と比べて，日系人社会はどのような特色があるのか，また，その要因は何なのか，ということを究明し，最終的にはカナダにおける日系人社会の文化変容の理論化を期待したい。

評者は，これまで華人社会を中心にアジア系移民集団に関心を寄せてきたが，椿報告を聞きながら，若干の感想をもった。日系移民に比べると，華人や韓国系の移民は，血縁的な結びつきが格段に強いように思う。その違いの重要な要因として，移住のプロセスにおいて，華人や韓国系の場合，家族や親類縁者の呼び寄せが際だっていることがあげられる。その結果，集中居住の傾向も日系移民よりもはるかに強く，本国からの継続した移民の大量流入がある華人や韓国系の移民は，民族固有の伝統文化をより継承しやすい状況にある。

評者は，また，椿報告を聞きながら，果たして移民にとって継承すべき文化とは，どの

ようなものであろうかと考えてしまった。折り紙，茶道，華道，武道……は，確かに日本の精神文化を反映するものであるが，カナダ社会への同化が進む日系人社会において，継承すべき日本文化とは，どのようなものなのであるかということを，改めて考えてみる必要があるように思った。

Ⅲ．石川友紀報告「南米における沖縄県系移民に関する地理学的研究－一世の地域的分布と職業変遷を中心に－」に関するコメント

本報告は，石川のこれまでの豊富な南米における日本人移民に関する現地調査の成果にもとづく，スケールの大きな研究であった。フィールドワークで撮影された貴重なスライド写真を用いて，日本人移民の具体的な生活実態が描写された。南米の日本人移民，とくに沖縄県出身移民の一世に焦点を当て，ペルー・ボリビア・ブラジル・アルゼンチンにおける彼らの地域分布と職業変遷を考察したものである。

4カ国における日本人移民には，それぞれの地域的特色がある。例えば，ブラジルではコーヒー耕地に，ペルーではサトウキビや綿花耕地への契約移民が多く，アルゼンチンでは，ブラジル・ペルーから転住した都市型自由移民が多いことなどを指摘している。今回の石川報告では，各国の地域的特色の考察に重点が置かれていた。評者は，これらの国々の日本人移民社会に共通する特色として，何らかのパターンを見出せるのではないだろうかと思った。すなわち，人口分布や職業変遷には，どの国にも共通するパターンが認められるはずである。このように共通するパターンが見出せる一方で，当然ながら各国の社会経済的諸条件や自然条件などの違いにより，日本人移民の適応様式には地域差が生じている。

これら共通点に着目して，南米における日本人移民社会の人口分布や経済活動に関して，規則性あるいはパターンを指摘することができよう。また，地域的差異に着目し，各国相互に比較考察することにより，日本人移民の南米社会への適応様式を，いくつかの類型にタイプ分けすることが可能ではないだろうか。評者のこのようなコメントに対して，石川は，WASP中心の北米社会と異なり，南米においては，日本人移民は独自の文化をより活かすことができたという主旨のことを述べていたが，このようによりマクロな視点から考察し，一般的な理論を導き出すことが，地理学の移民研究の発展において重要になってくると思われる。

Ⅳ．移民研究における地理学的課題

椿および石川の両報告を受けて，評者なりに，移民研究において，他の学問分野に比べ地理学がその学問的特色を発揮すべき点，移民研究において地理学がより社会的貢献をするための今後の課題などについて，最後にまとめてみたい。

1）移住のプロセスの究明

移民が，どのような地域から送出され，いかなる要因によって，どのようなルートで移住するのか，そして，移住先はいかにして決定されるのかという問題は，非常に複雑な条件や背景が絡み合っている。また，移民母村と移住先との結びつきに関する研究も重要であり，評者は，東南アジア華人社会と中国の「僑郷」（華僑の故郷という意味）の相互関係について考察した（山下，2002b）。

地理学は，自然的条件から経済的，社会的，文化的，さらに歴史的な諸条件などを総合的に分析し，合理的な要因の説明を試みてきた。移住のプロセスの究明という課題は，新しいものではないが，日本人移民でも華人移民に関しても，この課題については，十分な解明がなされているとは言えないのではないだろうか。

2) 移民の地域的特色とその要因の究明

地理学の重要な課題の一つは，地域的特色の解明である(山下，2003)。移民研究においては，移住先における移民の生活様式の特色を明らかにすることが重要である。たとえば，人口分布，居住様式，経済活動，社会，文化などの地域的特色は，移民が移住先において，ホスト社会へいかに適応してきたかをよく反映している。

評者は，このような立場から，日本，東南アジア，北米，ヨーロッパ，オセアニアなどの各地のチャイナタウンや華人社会の地域的特色，とくに現在の状況について論じたが(山下，2000)，このような地理学的な視点からの考察は，地理学以外の分野からも求められているものである。

従来の地理学的研究においては，地域的特色を指摘することに重点が置かれ，なぜそのような特色がみられるようになったかの要因の考察が不十分であったように思われる。地理学的研究の学問的評価を高めるためには，今後，このような要因分析に力を入れる必要がある。

3) 移民の普遍性とその要因の究明

以上述べてきた移住のプロセスの究明でも，移民の地域的特色とその要因の考察においても，最終的には，導き出された結果を一般化する必要がある。事例研究を積み重ね，先行研究の成果を十分吟味しながら，モデル化，類型化などの作業を怠ってはならない。

移民研究に限らず，地理学研究者は積極的な理論化を試みることが，地理学の社会的評価のためには必要である。

4) 地図化

地図化は，地理学の最大の「武器」の一つである。これは，他の学問分野と交流する際に，たびたび再確認させられることである。入移民に関する人口分布，人口移動，エスニックタウン，あるいは出移民の地域的分布などに関する地図を目にすることはあまり多くはない（山下，2002a)。移民に関するさまざまなデータの地図化は，他の学問分野の研究者が，地理学研究者に大いに期待していることである。

【文献】

山下清海『チャイナタウン－世界に広がる華人ネットワーク－』，丸善，2000，208頁.

山下清海「地図からみた華人の東南アジア移住とチャイナタウンの形成」，国際地域学研究5，2002a，229～241頁.

山下清海『東南アジア華人社会と中国僑郷－華人・チャイナタウンの人文地理学的考察－』，古今書院，2002b，190頁.

山下清海「華人社会研究と地理学」，高橋伸夫編『21世紀の人文地理学展望』，古今書院，2003，422～432頁.